筑波大学附属病院　茨城県立中央病院

筑波大学附属病院　茨城県地域臨床教育センター　［広報誌］

茨城県地域臨床教育センターだより

2018 Vol.28

〒309-1793　茨城県笠間市鯉淵6528　☎0296-77-1121　平成30年11月1日発行（第28号）

茨城県地域臨床教育センター赴任のご挨拶

教授
柳川　徹

専門領域 ■ 歯科口腔外科

－最後のダブルライセンス－

平成30年８月より筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センターに赴任いたしました。出身は千葉県で東京医科歯科大学歯学部を卒業し、歯科で２年間研修の後、平成元年に筑波大学医学専門学群に再入学し、卒後、同大学院博士課程を経て筑波大学医学医療系 顎口腔外科学から今回の人事となりました。

経歴から解るとおり、歯科医師・医師の両方の免許を持つダブルライセンスの口腔外科医ですが、事情を知らない方のために、少々解説いたします。世界（欧米先進国）の医療制度では、口腔外科と言っても歯科のみの免許で行う「口腔外科=Oral Surgery」と医師と歯科医師の免許を持って行う「口腔顎顔面外科=Oral and Maxillofacial Surgery」があります。日本の歯科は外科の医師から派生して始まった経緯から口腔外科はかつては医師が行っており、今日、「歯科医がここまで大きな手術をやっているの？」とびっくりする原点になっています。この法的な問題点は別の機会にいたしますが、私の第一の母校の東京医科歯科大学歯学部は医師が始めた国立最古の歯科大で、とくに第一口腔外科学講座は、代々、医師が指導して口腔外科を行っておりました。私が入局した時の教授も助教授もダブルライセンスで、阪大、東北大など主要な大学の口腔外科の教授はダブルライセンスでした。さらに当時は国公立の歯学部・医学部の口腔外科の教授の多くは東京医科歯科大学歯学部卒の歯科医で、その中心となる The King of Kingsこそがダブルライセンスでした。当時いた医局は、常勤が30人以上、名簿登載で100人を越え、教授は下っ端の医局員などはお目通りも簡単に許されないまさに皇帝でした。かくて、ダブルライセンス、カッコイイ！口腔外科はダブルライセンス！と思ったバカな私は筑波大医学専門学群に入学することとなりましたが、と、医学在学中に第一口腔外科学講座のダブルライセンスの政権崩壊で、まさかの歯科医師の天下となりました。むろん、歯科医師でも優秀で人格も立派で、誰が教授になろうと変わりないのですが、歯科医師だけの中に入ると出世争いのライバルとなる同世代以上の一部の歯科医からは激しいモラハラを受ける、いわゆるダブル狩りに遭うのが若いダブルライセンスの宿命です。日本歯科大学を卒業し筑波大学医学の先輩であるダブルライセンスの武川寛樹教授は他大学のダブルライセンスの教授の門を叩きましたが、筑波大の医師たちが守ってくれると信じた私は、愚かにも最強のダブルライセンスをめざしてCNS一流誌に出すのだ！というもう一つの自分の夢（結局、Cell共著に滑り込み、とりあえず夢は達成）を果たすため筑波大に残ってしまったものの、筑波大医師の結束はそんなに固くなく、やっぱりダブル狩りに遭って、武川寛樹教授が筑波大に教授で着任されるまで本当に辛い人生を送りました。さらには、各地の教授選に出ても、歯学部からは歯科医の敵意の対象となり、医学部からは「歯医者のくせに業績がありすぎるコイツは何者？」と何も知らない医師の皆様からも敵として扱われる憂き目を見ます。かくて、先進国の標準で本来口腔顎顔面外科にもっとも適した資格のダブルライセンスたちは消えていき、国立最古の歯学部の伝統を継いだ口腔外科のダブルライセンスは私で最後になり、今日に至ります。まさに清の愛新覚羅溥儀もびっくりの最後の皇帝「ラストエンペラー」です。ただ、医師の皆様も笑い事では済まされません。基礎系の医師もこのままなら消えて行くでしょうし、特定行為などの制度が進めば医師はいらなくなるかも知れません。そういう意味で最後のダブルライセンスはもう一度「医師」とは何かを考える契機なのかも知れません。

筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センター講演会の報告「気道管理アップデート－最近の流れとPEAS examについて－」

准教授
星　拓男

専門領域
- 臨床麻酔
- 手術医学
- 集中治療

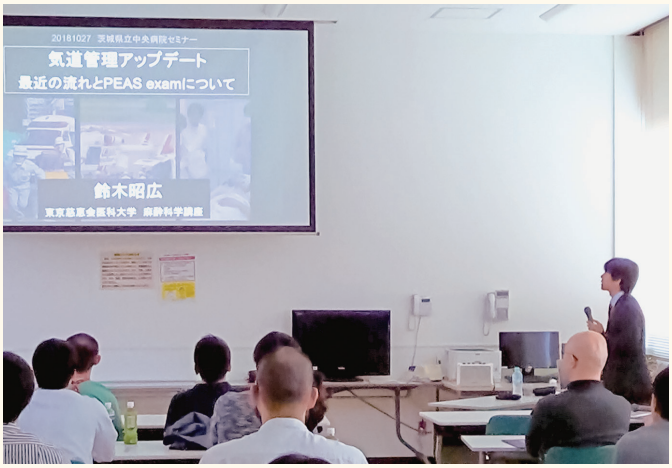
平成30年10月27日に茨城県立中央病院災害医療センターにて気道管理アップデート一最近の流れとPEAS examについて一 の講演会を開催しました。演者の東京慈恵会医科大学麻酔科教授　鈴木昭広先生は、若いときからブラード型喉頭鏡の権威で、気道管理のスペシャリストであるが、同時に最近まで救急部でドクターヘリに乗っていて、救急専門医、航空医療学会認定指導者などの資格を持ち、さらに超音波の世界では米国の経食道心エコーの資格にも合格しているなど超音波に関しても詳しく、気道、肺超音波を含め数多くの著書を持つ先生です。更に最近では医療安全の講習やプレゼンテーションの方法についての講演を行うなどマルチな才能を持つ先生でもあります。今回の講演の内容は、麻酔領域では、茨城県内の麻酔科医は普段行っていない分野の話であったため、県内の麻酔科医を中心に小児科医など32名が集まりました。

講演では鈴木先生が最近興味を持っておられる医療安全の話を絡めて、JCS-0の意識清明で歩行してきた患者さんが５分後にはJCSIII-300 と言われるような気道、呼吸、循環、中枢神経すべてが急激な変化を見せる、いわゆる病棟などで言う急変を人為的に作り出し、その対処を確実に行っていく麻酔の導入は、救急をやっていてもなかなか出会えないような貴重な経験の連続であることを改めて示していただいた。そのうえで麻酔科医が日常的に行う３つの気道確保の方法についてエビデンスを示しながらわかりやすく示していただき、気管挿管に関しては、第２世代、第３世代の気管挿管デバイスが、如何に気管挿管困難症例を減らすかを示していただいたとともに、それでも依然として非常に低い可能性ではあるが外科的気道確保が必要になることを示していただいた。後半の超音波のデモンストレーションでは、外科的気道確保のことも踏まえて、気道の超音波を実際に、気管を穿刺をするときに何を見てどのようにプローブを動かすか、どこで止めてどこに穿刺するかなど具体的にわかりやすく提示していただき、参加者も鈴木先生のそばまで近づき、その手元と画面を真剣に見ていました。

プレゼンテーションに関しても、１時間の講演に対し300枚以上のスライドと、その殆どに対し図が入っていて、文字が多いものは一つもなく非常にわかりやすいもので、人は視覚から得られる情報の方が、耳から得られる情報より遥かに多いので気道確保の際にいかに見やすくするかという講演の内容を、プレゼンテーションの面でもなるほどと納得させられるものでした。

デモンストレーションと合わせて90分の予定の講演があっという間に終わり、その後の質疑応答でも多くの質問が出ていました。今後今回の講演内容が臨床に生かされるであろうことを期待するとともに、鈴木先生および土曜日にもかかわらず参加していただいた先生方に感謝いたしたいと思います。

東京慈恵会医科大学麻酔科学講座　鈴木昭広先生



講演風景

筑波大学附属病院　茨城県地域臨床教育センター
〒309-1793　茨城県笠間市鯉淵6528　☎0296-77-1121
ホームページ　http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/